

## 研究委員会企画シンポジウム 1

## 実践知・臨床知の創造と質的方法

企画者・司会者	茂呂雄二 (筑波大学)
話題提供者	杉万俊夫 (京都大学)
	本山方子 (奈良女子大学)
	佐木みどり (揖斐幼稚園)
	香川秀太 (筑波大学)
指定討論者	やまだようこ (京都大学)

## 企画の趣旨

## 茂呂雄二

最近の『教育心理学研究』には、かなりの数の質的方法に基づく研究が掲載されており、人々の共通を通じた学びと育ちに関する新しい知見をもたらしている。本シンポジウムでは、この質的方法論がもたらした動きを捉え直すとともに、加速し先鋭化するにはどうしたらよいかを議論した。特に現場の実践者が自らの実践知・臨床知を自ら捉え直し、それを拡張するにはどうしたらよいかについてヒントになる議論が行われた。

実践家の持つ実践知あるいは臨床知は、実践対象に関する知である。実践は共同して行われるから、実践知・臨床知は、コミュニティに広がる社会的知であり、コミュニティのメンバーの文化的多様性がつくるヘテロな知である。

実践知・臨床知は、実践者自身にとっても、共同するコミュニティの他のメンバーにとっても、学びと育ちに関する言説的な知である。それぞれの実践者は、過去の経験と未来の実践をつなぐ見通しの知をつくり出そうとしている。同時に実践者は、この知を若い世代へと届けるため、様々なペダゴジックな言説を産出している。日々の活動への実践知・臨床知を養い、それを次世代に継承する上で、質的方法論は極めて有効である。

本シンポジウムでは、保育実践者、教師、看護実践者、コミュニティ住民などの具体的な実践を活写している研究者に参加を願い、実践知・臨床知のリアリティに迫るにはどうすべきか、また実践知・臨床知の獲得と継承をどう支援できるのかについて議論する。

## 質的研究があるとしたら

## 杉万俊夫

## 1. 質的研究

既にして(定量的研究に対する)定性的研究という言葉が

あるにもかかわらず、なぜいま、質的研究を標榜するのか。その理由があるとしたら、質的・量的の区別など全く関係ない。その理由は、いつにかかって研究者と研究対象の関係の捉え直しにある。「研究対象に外在する研究者」という両者の関係が不可能であること、すなわち、両者は程度の差こそあれ協同的实践の関係にあること、この認識の転換なくして、質的方法など標榜する意味はない。

当事者と研究者の協同的实践は、必ず、特定の時代、特定の場所における特定の人物たちによる協同的实践である。だからこそ、普遍性など、はなから問題にならない。普遍性に代わる規準は、メッセージ性とインターローカリティだ。

協同的实践(争いも含む)は、特定の価値が共有されて初めて可能になる。だからこそ、価値中立性など問題にならない。価値中立性を装うことは、支配的価値に呪縛されていることを意味するのみ。

協同的实践は、現実の変化につながってこそ、なんぼのものだ。現実を動かすには、主観的言説が必須。「水の分子は水素原子2個と酸素原子1個からできている」と(客観的言説を)何度叫んでも水はできない。

以上のような点(まだ他にもあるが)に疎いと、「少数の事例から何がいえるのか」といった反発に立ち往生してしまうことになる。

## 2. 科学の言説空間と人間科学の守備範囲

人間が知ろうと知るまいと存在する事実を探求する自然科学においては、研究対象を一線の向こう側に据え、研究者は一線のこちら側から研究する。それに対して、もう一つの科学、すなわち人間科学においては、当事者(研究対象)と研究者が協同的实践を展開し、そこから知識を紡ぎ出す。従来自然科学のスタンスで研究されてきた現象を、人間科学の射程に捉えていくこと——それこそ、質的研究(という運動)の意義である。

科学とは、言説空間を豊かにする営みである。しかも、科学の特徴は、文学とは対照的に、暗示的な含蓄、行間の意味に頼ることなく、明示的な言説にこだわる点にある。では、自然科学と人間科学は、言説空間を豊かにするという科学としての使命を共有しつつ、どのように異なっているのだろうか。本発表では、自然科学と人間科学の言説空間の違いを、廣松渉の言語論・判断論を援用